当院における Daratumumab 使用患者に対する現状と運用

◎石井 佳代子[1)]、大友 颯生[1)]、阿部 柊[1)]、白谷 泰祐[1)]、星 雅子[1)]、橋本 はるみ[1)]、渡辺 隆幸[1)]、白石 満[1)]
一般財団法人 太田綜合病院附属太田西ノ内病院[1)]

【はじめに】Daratumumab（以下 DARA）は、CD38 抗原を標的とするヒト型 IgG1κ モノクローナル抗体であり、再発および難治性の多発性骨髄腫治療薬として 2017 年 11 月に販売開始となった。CD38 抗原は骨髄腫細胞だけでなく赤血球膜表面にも僅かに発現しており、DARA 投与患者においては、抗グロブリン試験で偽陽性反応を呈する場合があることが知られている。当院でも DARA 投与症例を経験し、その使用状況と輸血管理室での運用について報告する。

【対象および方法】期間は 2018 年 1 月～2019 年 5 月。DARA 投与患者 10 名（男性:7 名 女性:3 名 年齢:46～81 歳）を対象とした。方法は日本輸血･細胞治療学会推奨の多発性骨髄腫治療薬（抗 CD38）による偽陽性反応への対処法･一部改定版（DTT 処理赤血球の作製法および DTT 処理赤血球による間接抗グロブリン試験）に則り、不規則抗体検査･交差適合試験を実施した。試薬は自家調整した。

【運用】①DARA 投与が決定した時点で主治医より輸血管理室に連絡を受け、投与前に血液型･不規則抗体検査の実施を確認する。②投与患者は検査部内の情報共有化のため輸血部門システムにコメント入力を行う。③DARA 投与後に赤血球輸血が必要となった場合、DTT 処理赤血球と未処理赤血球を用い不規則抗体検査･交差適合試験を実施する。④原則として日勤帯に輸血検査担当者が検査を実施する。

【結果】DARA 投与前の不規則抗体検査は全例で陰性であった。赤血球輸血が施行されたのは 10 例中 8 例、計 142 単位であった。DARA 投与後、未処理赤血球での不規則抗体検査･交差適合試験は、輸血を実施した 8 例中 7 例で陽性となり、DTT 処理赤血球では全例陰性となった。

【まとめ】DTT 処理赤血球を用い検査を行うことで、偽陽性反応は回避された。DARA 投与の情報がなければ、結果の解釈に混乱をきたし精査に時間を費やすことになるため、臨床側との情報共有を図り、適切な手段で効率的な検査を行っていきたい。また、運用においては、今後 DARA 投与患者が他の医療機関を受診する可能性もあることから、患者情報カードを使用するなど臨床側とともに体制を整えて行くことが必要であると考える。

連絡先　024-925-1188　輸血管理室（内線 30332）